

大分合同新聞創刊125周年記念事業

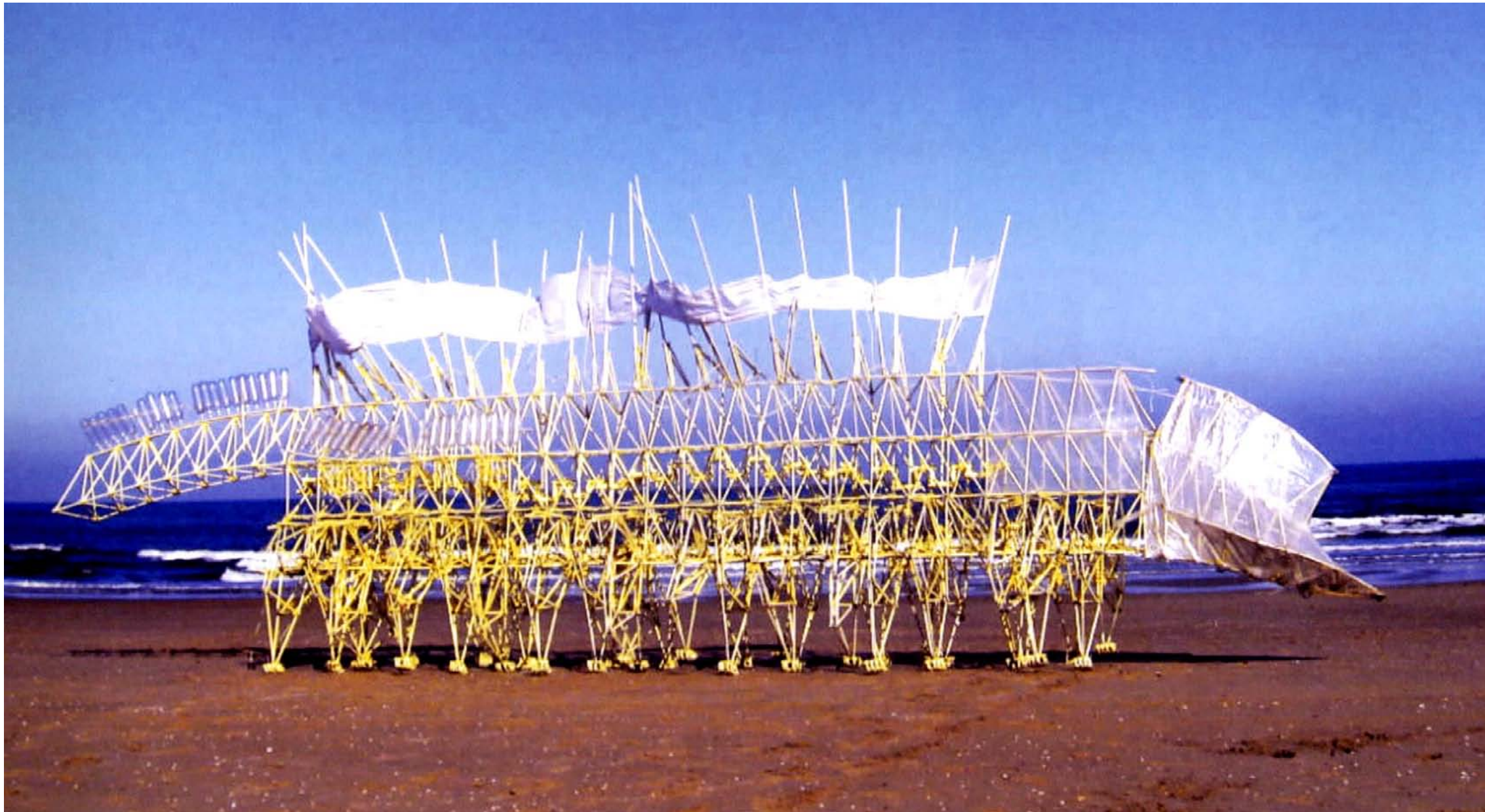
テオ・ヤンセンに魅せられて



(<http://theo.jansen.net/> Copyright©2011 MEDIA FORCE LTD.)

④ 魅せられた人たち（後）

(<http://theo.jansen.net/> Copyright©2011 MEDIA FORCE LTD.)



翼が大きな恐竜のように風に向かってうねることから「竜の翼」とも呼ばれる（高さ 3.9 m）

フジテレビ・CG事業部副部長
山崎 吉広さん

2011年
2月20日掲載

衝撃、無機物が生き物に

5年前、インターネットでテオ・ヤンセン氏のビーチアニマル（砂浜の生物）を見たとき、プラスチックチューブという無機物で直線的な素材の組み合わせが生き物のように動く姿に衝撃を受けた。

動いている姿は気持ち悪いくらいだが、その生々しさが理屈抜きに面白かった。

日本科学未来館（東京都）で2月14日までであった「テオ・ヤンセン展」（フジテレビ共催）の開催前に、自分で作ってみようと思い、まずCGで外形を作った。

その後、プラスチックチューブをオランダから輸入し、建築を研究している大学院生と2人で約1カ月をかけて作り上げた。

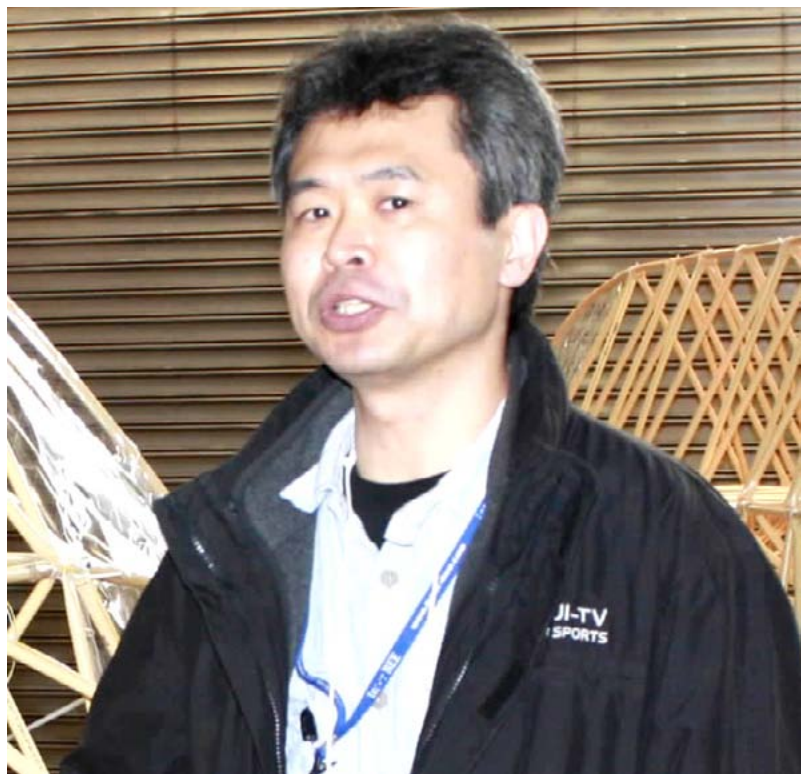
一番大変だったのは、パイプとパイプをつなぐベアリング（軸受け）のところ。硬すぎると曲がりにくくなるし、緩すぎでは安定感を失う。テオ氏にメールで確認しながら、最終的には3体を作り上げた。

テオ氏はコンピュータで計算して、13パターンの長さのパイプで組み立てれば最も安定することを見つけた。この「13のホーリーナンバー（聖なる数字）」をテオ氏は公開している。

誰が模倣してもよいと思っているのだろう。私のレプリカを見ても「自分の子どもが繁殖した」と喜んでいた。周囲から私は「ザキ・ヤンセン」と呼ばれるようになったが、それもテオ氏は笑って認めてくれた。

テオ氏は穏やかで、聞いたことは何でも教えてくれる。テオ氏が芸術と科学の両分野から評価されているのは、そんな心の広さが出ているからだと思う。

やまざき・よしひろ。放送番組などで使うCGを制作。テオ・ヤンセン展の開催を社内で提案。自作のビーチアニマルのレプリカは、日本科学未来館で開かれた「テオ・ヤンセン展」の屋外体験用に使った。



実際にビーチアニマルを作った山崎吉広さん

「テオ氏の親近感が湧く人柄も魅力の一つ」と鈴木伸治さん



TVディレクター

鈴木伸治さん

2011年

2月21日掲載

進化の過程こそアート

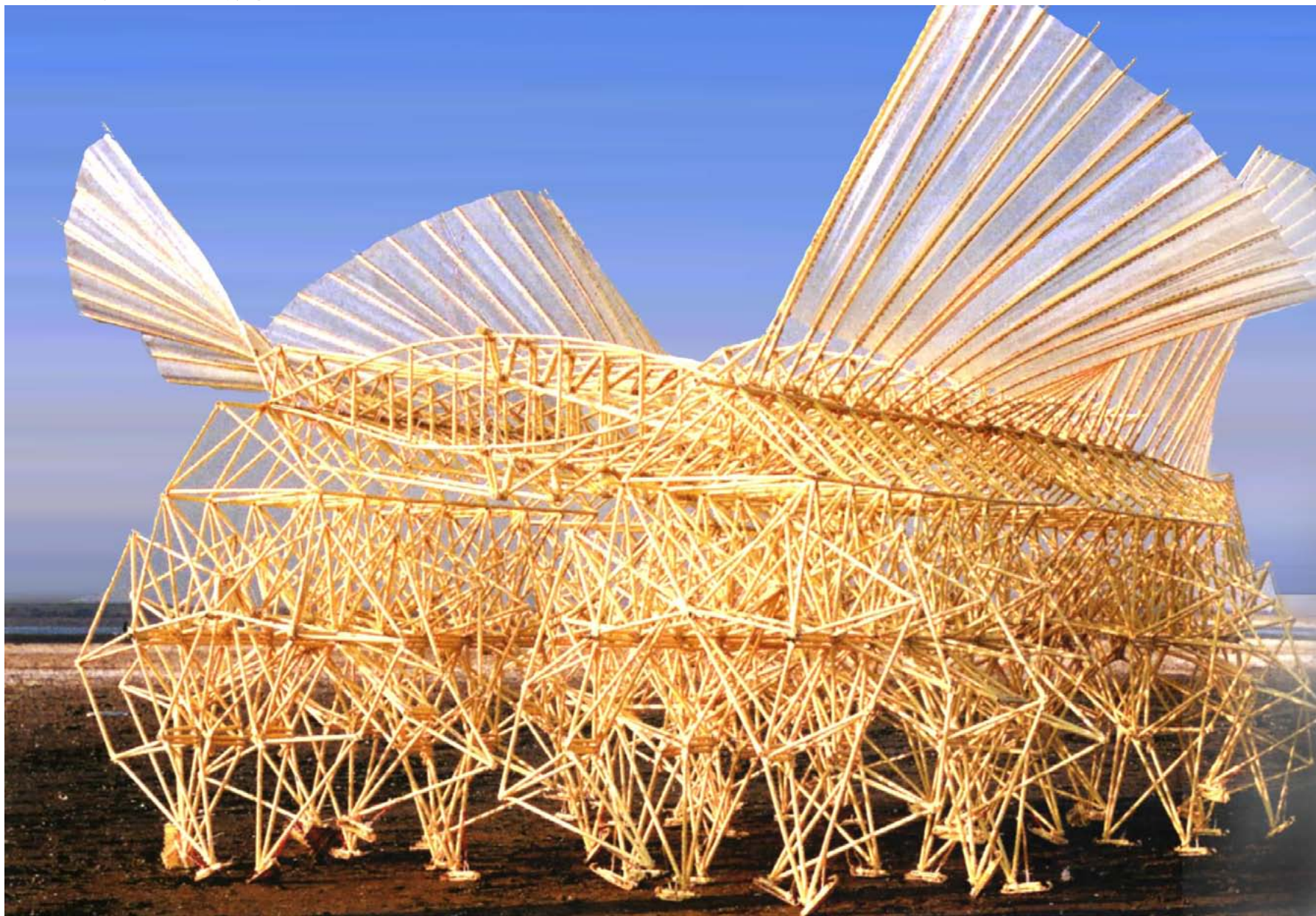
作品群をダーウィンの進化論になぞらえたユニークな創作哲学にひかれ、テオ・ヤンセン氏のドキュメンタリー番組を作った。

テオ氏はプラスチックのチューブで組み立てたビーチアニマル（砂浜の生物）を生き物と表現するが、モーターなど機械の動力を使わずに歩行する姿は、確かに生命をイメージさせる。制作当初は動かなかったビーチアニマルが、やがて風を体内に蓄えて動けるようになり、今では水に反応するセンサーで水没の危険を回避できる。作品ごとに新たな能力を身に付けてきた過程は人類の進化と同じよう。その進化の過程こそがアートではないかと、奥深さを感じる。

テオ氏が生活するオランダを取材で訪れ、1週間ほど密着した。あふれ出るアイデアに天才性を見た一方、娘をこよなく愛する姿などは気さくな普通のおじさん。親近感が湧く人柄も魅力の一つだろう。

すずき・しんじ。番組制作会社テレビマンユニオン勤務。NHK・BSで1月1日に放送された「風を食べる生物—生命を創る男テオ・ヤンセンの挑戦」を制作した。

(<http://theojansen.net/> Copyright©2011 MEDIA FORCE LTD.)



番組では、中学生グループがオリジナルのビーチアニマル作りに挑戦する様子を追った。テオ氏の作品は巨大で、しかも動くのに、チューブやセロハンテープなどで、身近な素材を使っている。生徒は「すごいけど、自分たちにもできそう」と刺激を受け、活発にアイデアを出し合って試行錯誤を重ねていた。

「人の作品を単にまねるのはゴールがあって面白くない。自分で考え、新しいモノを生み出す楽しさを感じてほしい」。そうテオ氏が願う通り、制作に夢中だった生徒たちの真剣な表情が印象に残っている。

背中の四つの羽で動くビーチアニマル（高さ 2.8m）

ランドスケープデザイナー 団塚 栄喜さん

2011年
2月22日掲載

科学と一体の環境芸術

2009年に東京都で開かれたテオ・ヤンセン展の「風を食べる生物」というフリースを見たときに、私が取り組むサステイナブル（持続可能な作品づくりに関係があるかもしれない）と思い、じっくり見てみた。



予備知識はなかったが「どうなっているんだ？」という人の想像力を刺激するアートに感動した。

2月14日まで開かれた日本科学未来館（東京都）の「テオ・ヤンセン展」では、より大きなビーチアニマル（砂浜の生物）が来た。思ったより動きは軽しいし、時折感じるぎこちないところも、生き物っぽくてよかった。

ビーチアニマルについて科学の観点とか、芸術の観点とかで話すことはできないと思う。科学技術と芸術が一体となった未知なものだと感じている。恐らく、その垣根を越えて感動するものだろう。

1960年代に流行したキネティック・アート（動く芸術）のようだが、それとは少し違う印象を受けた。視覚的な芸術というよりは、目に見えない「風」を顕在化する環境芸術と言えるかもしれない。

テオ氏は20年かけて今のビーチアニマルにたどり着いた。

だんづか・えいき。1963年、佐伯市生まれ。佐伯鶴城高卒。2000年にランドスケープデザインスタジオ「アースケイプ」を設立。越後妻有アートトリエンナーレなどで活躍。佐伯市や大分市の中心市街地の再開発にも取り組む。

「ビーチアニマルは芸術と科学の垣根を越えた作品」と語る団塚栄喜さん

大分合同新聞創刊125周年記念事業「テオ・ヤンセン大分展」は2011年7月9日から9月30日まで大分市美術館で開催

(<http://theojansen.net/> Copyright©2011 MEDIA FORCE LTD.)



同じアーティストとして、この諦めない姿勢に共感する。やりたいことを選択して続けていくことの大切さ、ものづくりのあるべき姿に同じアーティストとして勇気をもらった。

「テオ・ヤンセン大分展」では、ビーチアニマルが砂浜を駆ける姿をぜひ見てみたい。“本来の姿”に迫力を感じることができると思う。

連載担当 東京支社・糸永健太郎、
文化科学部・羽山草平

2頭のビーチアニマルをつなげた。歩行ユニットは全てプラスチック製（高さ 4.4m）

■オオイトデジタルブックとは

オオイトデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公開します。そして、

読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「テオ・ヤンセンの世界」「同・魅せられて」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！



別 府 大 学

デジタル版「テオ・ヤンセンの世界」 第4回

編集 大分合同新聞社
初出掲載媒体 大分合同新聞（2011年1月25日～2011年2月22日）

《デジタル版》
2011年7月22日初版発行

編集 大分合同新聞社
制作 別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部／川村研究室
発行 NAN-NAN 事務局
(〒870-8605 大分市府内町3-9-15 大分合同新聞社 企画調査部内)

© 大分合同新聞社

●デジタル版「テオ・ヤンセンの世界」「同・魅せられて」について

「テオ・ヤンセンの世界」等は、大分合同新聞社が創刊125周年記念事業として2011年1月から翌2月まで、同紙夕刊に掲載した連載記事。今回、デジタルブックとして再構成し、公開する。登場人物の年齢をはじめ文中の記述内容は、新聞連載時のもの。

2011年7月1日

NAN-NAN 事務局